



全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol. 22 (Apr. 2015)



茅葺きの民家と在来のタンポポが残る、伝統的な田園風景（島根県安来市）

日本自然保護大賞を受賞しました

日本自然保護大賞とは自然保護と生物多様性の保全をより積極的に推し進め、自然と人との暮らしの調和のとれた地域や社会づくりを推進する目的で創設されたものです。日本で自然保護憲章が制定され 40 周年という節目の年でもある今年、かつての「沼田眞賞」をリニューアル、7つの部門を設けたものです。今まで当会が手掛けてきた草原データベース整備や文献リスト整備、情報提供事業、WEB広報管理運営事業、シンポジウム・サミット開催支援事業が、昨年 11 月阿蘇での「第 10 回全国草原サミット・シンポジウム in 阿蘇」開催に当たって飛躍的に整備され、草原を有する市町村と地域・民間行政の枠を超えた連携を実感しました。全国草原再生ネットワークはその連携を関係市町村だけでなく、国民一人一人の草原に対する理解を得て、日本国中に広げたいという思いで「自然の価値を学び伝え、広めた教育普及部門」に応募しました。

平成 27 年 3 月 8 日、日比谷コンベンションホール(東京)の授賞式には高橋会長を始め、10 人の理事、会員が出席し喜びを分かち合いました。全国草原再生ネットワークの講評を担当したのは 7 人の選考委員の一人、(株)山と溪谷社の神谷雄二氏です。神谷氏は当会の活動を非常に高く評価し、「従来のいわゆる教育普及活動とは異なり、草原の保全・再生活動を行う NGO、自治体、個人をつなぐネットワーク型の活動を展開し、情報や活動ツールの提供や共有化、組織の連携を促進する機能を果たしている。ともすれば孤立しがちな地域の活動を下支えして、近年各地で盛り上がりを見せてきた草原保全・再生の教育普及に大きく貢献したことを評価する。また、全国草原再生ネットワークはハブ的な要素を



授賞式の様子（上）と賞状（下）

持ちながら自らも活動を続けるこの形は本来ならば、日本自然保護協会がすべき活動であり、協会の上に行く活動である」と絶賛されました。その後、受賞団体の講演があり、長い期間の沢山の活動を 15 分という短い時間の中で伝えなければならない制約の中で、会長の話は多くの皆さんの共感を得られたものと思います。その後の懇親会や三次会では大いに盛り上がり、次の活動継続のための大きなエネルギーになったことは間違いありません。



活動を紹介する高橋会長



授賞式後の記念撮影

3月13日には、全国草原再生ネットワークの事務局がある島根県大田市において、会長を含め4名で市長を表敬訪問し、自然保護大賞の受賞を報告しました。あわせて、昨年秋の全国草原サミット・シンポジウムへの協力のお礼、今後のサミットの予定なども伝えました。

大田市報で紹介されました



各地からの報告

第11回全国草原サミット・シンポジウムの開催について (太田洋二：新温泉町)

草原の保全と再生について考える「第11回全国草原サミット・シンポジウム」を2016年に兵庫県の新温泉町で開催します。近畿地区では初めての開催となります。

新温泉町は、兵庫県の北西部に位置し、北は日本海、西は鳥取県、南・東は香美町に接しています。総面積241平方キロメートルで内陸部は1,000メートル級の山々に囲まれ、山陰海岸国立公園をはじめ自然公園指定区域が46%を占める自然豊かな山間地域です。平成22年には山陰海岸ジオパークとして世界認定されるなど貴重な地質遺産も有しております。

また、湯村温泉や冬期の松葉カニなどを求め多くの観光客が訪れています。

新温泉町には、鳥取県にまたがる「氷ノ山・那岐山国定公園」内に「上山高原」(約400ha)があり、標高800~900メートルの間にススキの草原やブナ



上山高原のススキ草原

林などが広がっています。

昭和30年代頃までは、全国の黒毛和牛のルーツといわれる但馬牛の放牧地利用や冬期の乾燥粗飼料(干し草)の生産場所として重要な役割を担ってきました。

冬期には3メートルを超える積雪があり大変厳しい自然環境ながら、春の山焼き風景や秋のススキ一面の草原は地域の風物詩でもあります。

しかしながら、社会・経済・農業環境の変化等により高原の活用が減り、過疎化や高齢化などで管理が困難な状況となり、クマザサが繁り、灌木に覆われるなど荒廃が懸念されるようになってきました。

そのような状況の中で地元住民を中心にかつての高原に再生しようとの機運が高まり、関係機関の協力のもと、法定の自然再生協議会「上山高原自然再生協議会」が組織され、特定非営利活動法人「上山高原エコミュージアム」を中心に、上山高原と麓の



山焼きの様子



今年の山焼きの様子 (H27. 4. 26)

集落を「まるごと生きた博物館」としてとらえ、ススキ草原やブナ原生林をはじめ、地域資源の活用を図りながら特徴ある自然環境の保全、再生に取り組み、地域の活性化につながる活動を展開しています。このサミット・シンポジウムを契機に草原の有す



今年の山焼きの様子 (H27. 4. 26)

る多面的機能、生物の多様性、自然再生の大切さを再認識するとともに、草原の保全、活用と観光、交流促進による持続可能な地域づくりをめざしていきます。全国からたくさんの方の参加をお待ちしています。

草原を学び・楽しみ・守る

(井上聡美：阿蘇グリーンストック)

様々な活動の拠点～『阿蘇草原保全活動センター』がオープン!!～

熊本県阿蘇市に『阿蘇草原保全活動センター』がグランドオープンし、4月19日に環境副大臣をはじめ多くの関係者の方に参列いただき、式典が行われました。このセンターは「草原学習館」と「草原情報館」の2つの施設からなり、一体的に運営されます。

環境省が設置した「草原学習館」は、草原を学ぶための展示コーナーやワークショップや会議が行える多目的会議室があり、子供たちをはじめとした草原学習や体験活動に利用できます。また屋外作業スペースや用具倉庫を備えるなど、野焼き支援ボランティア活動を進めるための拠点ともなっています。

阿蘇市が設置した「草原情報館」は、草原について様々な情報のワンストップサービスを有する総合窓口機能があり、草原に関わる地域の人々（団体・機関）と連携しながら、草原文化はもとより観光や農畜産業などを一般の人々へつなぐ拠点となります。

どちらの施設も公益財団法人阿蘇グリーンストックが管理運営を行うこととなっています。長年阿蘇の草原保全活動を行ってきたグリーンストックにとっては、まさに待望の施設で



阿蘇草原保全活動センターの外観



草原学習館を見学する来館者



草原学習館を見学する来館者



草原学習館でのワークショップの様子

あり、センターの運営を担えることは、将来に向けて大きな励みとなります。

引き続き関係団体及び関係者の皆様にはご支援、ご協力をお願いするとともに、これからも草原保全事業、環境学習・体験事業などの取組みを進めながら、草原に関する運動をより広げていけるよう張り切っていますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。



草原情報館の様子

草原再生ことはじめ

(増井大樹：滋賀県在住)

現在、熊本県阿蘇地域や兵庫県上山高原をはじめ全国各地で草原再生が行われています。草原の再生とはいっても、森であったところがすぐさま草原になるわけでもなく、人が再び自然に手を入れることで少しずつ草原へと戻っていくものです。このニュースレターを読まれている方の中にも草原再生に関わっている方も多いとは思いますが、今回は私が研

究をしている阿蘇市西湯浦牧野と群馬県のみなかみ町上ノ原の事例を紹介したいと思います。

この2つの地域では、2014年の秋に森林を草原に戻すため樹林の伐採が行われました。上ノ原(写真1)では樹齢40年ほどのミズナラ林が伐採されました。約40m×60mほどの狭い範囲の伐採でしたが、森林塾青水の会員や地元の人の協力を得ながら、



写真1：みなかみ町上ノ原の草原再生地



写真2：阿蘇市西湯浦の草原再生地

述べ1週間ほど時間がかかりました。西湯浦（写真2）では、木は小さいものの、急斜面であったためにさらに多くの時間と労力がかかりました。

春には野焼きが行われました。西湯浦では3月11日に行われましたが、樹林の伐採地では枯草の堆積がなかったため、ほとんど火が入りませんでした。ただ、一部では伐採したスギに火が入り、さながら山火事のように地面が黒く燃えてしまった場所もありました（写真3）。

ところで、森林を伐採したら本当に草原に戻るのでしょうか？ 戻るとしたらどのようなメカニズムで戻るのでしょうか？ 私は3つの仮説を立て、現在、研究を行っています。

- 仮説1：樹林内で細々と生き残っている草原性植物が分布を拡大する。
- 仮説2：地面の中に眠っている草原性植物の種子が芽生える。
- 仮説3：ほかの場所から飛んできた種子が草原を作る。

仮説1に関しては、今回伐採した森林の中を伐採前に調査してみると、かつて草原だった場所であるにも関わらず、草原性植物はほとんど見つかることができませんでした。上ノ原の事例だと1㎡あたり1個体、西湯浦の事例だと1㎡あたり0.5個体程度しか森林内には草原性植物は見当たらず、その種数もとても少ない結果となりました。仮説2、3についてはまだまだ分からないことばかりですが、写真



写真3：よく燃えたスギ伐採地（阿蘇）

3のように樹林に火が入った場所では山火事のように地面内部までの温度が上がり、土中の種子が死滅してしまう可能性も心配されました。研究室に草原性植物の種子約30種（キキョウやオミナエシなど）を持ち帰り、80℃の熱湯に10秒間浸し、発芽実験を行ったところ、ほとんどの種子で発芽が見られず、ヤマハギだけが生き残る結果になったことから、草原性植物の種子は土壌が高温になる環境には弱いことが示唆されました。

まだ、調査をはじめて1年目で、草原再生についてはまだまだ分からないことがたくさんあります。皆さんの経験や知識をお借りしながら、草原が再生するメカニズムを解き明かし、より良い草原再生を目指して行きたいと思います。

全国草原リレー（第9回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第9回は、理事でもある熊田氏に、霧ヶ峰について紹介し

て頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

■「霧ヶ峰」優れた景観を作るもの・・・■

（熊田章子：ネットワーク理事）

霧ヶ峰には、広大な草原と南アルプスや中央アルプス、富士山、遠くは白馬まで見渡すことのできる場所が魅力となり、毎年多くの観光客が訪れます。草原を作り出すものは、気候や、火入れ、

採草、雑木刈りなどの管理によるものですが、その土台となる地形を作り出しているのは、地球の営みによるものです。

そして、霧ヶ峰の特徴の一つとして挙げられる

のが、ただだかに広がる地形です。この地形は、霧ヶ峰の最高峰である車山（1,925m）周辺からの噴火による噴出物とその後の浸食により形成されていることに由来していると言われ、安山岩を主とした粘り気の少ない流れやすい溶岩であったことから、なだらかな地形が作られました。一方で、火口の一つである車山南側は爆裂火口と推定され、断崖が見られます。この場所は、採草などが行われにくかったことや、水分条件などにより、ズミなどの広葉樹をはじめとした樹叢が発達しています。



そして、ちなみに、採草などの生業の場所として利用されてきた以前に、このような地形・地質を持つ地域だからこそ、高標高・高冷地にも関わらず、貴重な岩石を利用するために多くの人が利用していたという歴史もあります。黒曜石にあたっては、霧ヶ峰で採取された黒曜石が青森県の三内丸山遺跡で出土するなど全国に供給され、また鉄平石は明治神宮の参道にも使われているようです。



さて、「草原リレー」ですが、「草原」そのものについては、あまり触れませんでした。

なだらかな地形が広がる霧ヶ峰高原

しかし、霧ヶ峰の優れた草原景観が、「火山活動によってもたらされたなだらかな地形」、「山麓から遠く、高標高の冷涼地であるにも関わらず採草地として利用を考えた先人」の奇

跡のコラボレーションによって生み出されたものであることを気づかされ、この地形がなかったなら・・・と考えさせられます。

この奇跡から生まれた景観を私たちは後世まで伝えていかなければならないのでしょうか。

霧ヶ峰の草原の成り立ちをお知りになりたい方には、霧ヶ峰ネットワークが作成した「霧ヶ峰草原史」を差し上げます。ご希望の方は霧ヶ峰ネットワーク 担当：熊田（kumachan1@me.com）までご連絡くださいませ。



霧ヶ峰での火入れの様子

※「霧ヶ峰草原史」は様々な方にご意見いただきながら、内容を更新してまいりますので、お気づきの点がありましたら、お知らせくださいませ。

草原をめぐる動き (2015年4月~7月)

- 4/25-26 春の風物詩「茅場野焼きと早春の里山散策」
(場所:群馬県みなかみ町上ノ原、連絡先:森林塾青水)
- 4/26 山焼き後の雲月山植物観察会(場所:広島県山県郡北広島町雲月山、連絡先:西中国山地自然史研究会)
- 5/2 阿蘇わくわくいきもの探険隊(場所:熊本県阿蘇郡高森町、連絡先:南阿蘇ビジターセンター)
- 5/10 乙女高原の遊歩道づくり(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 5/10, 31 乙女高原のスマイル観察会(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 5/12 小清水原生花園「火入れ」(場所:北海道斜里郡小清水町、連絡先:小清水町役場)
- 6/6-7 第6回茅葺きフォーラム(広島県東広島市大会)「藝州茅葺きの技と風景」(場所:広島県東広島市市民文化センター アザレアホール、連絡先:日本茅葺き文化協会)
- 6/28 マルハナバチ調べ隊(場所:乙女高原(山梨県山梨市牧丘町)、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 7/5 草原の復元作業1(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台エコ・ミュージアム)
- 7/19 秋吉台お花畑プロジェクト1(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台エコ・ミュージアム)
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

■第9回全国草原再生ネットワーク総会の案内

全国草原再生ネットワークの総会を下記のとおり開催します。総会にあわせて、世界農業遺産に登録された静岡県の茶草場を見学するエクスカーションも計画しています。詳細については、後日お知らせします。

【日 時】2015年6月27日(土)午後

【場 所】静岡県掛川市周辺を予定

【内 容】事業報告、事業計画、各地からの報告や意見交換 ※終了後、懇親会を予定

【エクスカーション】6月28日(日) 静岡県掛川市の茶草場の見学を予定しています。

茶草場の詳細については、<http://kakegawa-kankou.com/chagusaba/>をご覧ください。お茶畑に敷く草を刈るための草原が伝統的に残されており、そこには希少な草花も見られるという、独特な草原を見学できます。

※ニュースレター20号の表紙写真のキャプションで、撮影場所を「熊本県高森町」と書きましたが、正しくは「熊本県阿蘇市」の間違いです。お詫び申し上げます。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 22 2015年4月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】このたび全国草原再生ネットワークでは、日本自然保護大賞をいただくことができました。関係のみなさまのご協力のおかげと感謝しております。各地で草原保全や草原再生が進むなか、ゆるやかなネットワークにより、情報の提供やサミット・シンポの開催などを続けてきたことが評価されたものと思います。一方で、草原の存在やその重要性は、十分に認知されているとは言いがたく、その周知は引き続き大きな課題といえるでしょう。今回の受賞が、さらに草原への理解を増すための、良い機会になることを願っています。